会報　文化財保存新潟県協議会　第５３号　2013年９月２８日発行

新幹線駅の真ん前が遺跡？　遺跡の活用は･･･？

“文化財と観光”を考えた第15回文新協大会

文化財保存新潟県協議会第15回大会に参加して

山田　浩市（新潟大学人文学部３年生）

私は、7月20日に新潟市歴史博物館で行われた文新協の第15回大会に参加した。テーマは「文化財と観光を考える～弥生のクニ“釜蓋遺跡”と北陸新幹線開通～」。そこでは、二人の講師の先生からお話を伺うことができた。

釜蓋遺跡の活用を語った小島さん

新鮮な視点を提示した澤村さん

１人目は、新潟県文化財保護指導委員の小島幸雄氏であった。小島氏は、上越市にある釜蓋遺跡について、その保存と活用に焦点を当てて話を展開された。まず、釜蓋遺跡についてであるが、同遺跡は北陸新幹線の新駅である上越妙高駅の周辺開発に先立った事前調査の中で見つかった、弥生時代終末期から古墳時代初期の集落跡である。当時すでに史跡に指定されていた斐太遺跡や、当時上越市が国指定史跡にしようとしていた吹上遺跡と合わせて、弥生時代から古墳時代を知る重要な遺跡であるという。この３遺跡を一体として保護していこうというのが、同市の基本スタンスのようである。同遺跡は先に述べた新幹線駅から非常に近く、保存や活用の仕方によってはすごく多くの人々が訪れる可能性が高い。それ故、様々な工夫が必要になってくる。

現在、同遺跡は発見から間もないこともあり、発掘調査面積は遺跡全体の10％程度であり、遺跡の整備も合わせると、とてもではないが2015年に迫った北陸新幹線開業までにすべての調査を終えるのは不可能である。そのため、新幹線開業後も継続して調査していくという。そのため、私は観光客の増加が見込める新幹線開業後に、遺跡発掘の現場の様子を公開するのもいい手ではないかと思う。体験発掘など、実際に発掘調査に参加するというのは考え物であるというのが正直なところではあるが、見学などというかたちで調査の様子を公開するなどするだけでも、考古学に親しみを持つ人が増えるのではないかと私は考えるのである。

２人目は、新潟大学経済学部准教授である澤村明氏であった。澤村氏は、「遺跡の観光経済学」というテーマで、遺跡の文化的な価値のみならず、経済的な価値にも焦点を当てて話を進められた。まず同氏は、遺跡の経済的価値と文化的価値をそれぞれ定義し、経済的価値を測る方法として、2つを挙げた。トラベルコスト法（ＴＣＭ法）と擬制市場法（ＣＶＭ法）である。

ＴＣＭ法とは、遺跡訪問者が支払う旅行費用が、そのままその遺跡の価値であるとする考え方であり、その旅行費用から遺跡の価値を換算する方法である。しかし、この方法は遺跡訪問者のデータしか参考にできず、その遺跡の存在価値や付加価値については測りかねるのが現状である。

ＣＶＭ法とは、「この遺跡を維持するために幾ら払ってもいいですか」「この遺跡がなくなるとし

たら、幾ら貰ったら我慢できますか」という２つの質問をして、積算する方法である。しかしこの方法は、支払い意志額と受け取り補償額との間で乖離がある点、寄付で聞くか税金で聞くかによって違いがあることがある点、部分保存については尋ねられない点などが問題点として挙げられるという。

次に同氏は、遺跡の経済効果として、佐賀県吉野ヶ里遺跡と青森県三内丸山遺跡を例に挙げ、その波及効果も含めて検討された。遺跡訪問者のへのアンケート結果なども交えながら、遺跡があることでどのような経済効果があるのか検証した。

同氏は更に、世界遺産指定に伴う経済効果についても検証された。国内の世界遺産のうち、「法隆寺地域の仏教建造物」、「姫路城」、「屋久島」、「白神山地」、「古都京都の文化財」、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」、「原爆ドーム」、「厳島神社」、「古都奈良の文化財」、「日光の社寺」、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の12例を挙げ、世界遺産登録前後10年で、観光客数はどうなったのか、検討した。結果、観光客数が明確に「増えた」と言えるのは、「白神山地」、「古都奈良の文化財」、「日光の社寺」の３例だけで、あとは±５％未満がほとんどで、「法隆寺地域の仏教建造物」にいたっては減少傾向であった。以上のことから、世界遺産に登録しても、必ずしも爆発的な観光客数の増加は期待できないことが分かる。

最後に同氏は、遺跡のマネジメントにも言及した。そこでは、遺跡の維持・管理について、現代を「遺跡は減らないが予算は減る時代」として、参加と協働の必要性を述べられた。

以上の二人の方の話を聞き、私は、遺跡の保存・活用というものが必要であると再認識することができた。特に地方においては、今後ますます疲弊していくことが予想される。

その中で、活路を観光に求めるのは自然なこととともいえる。自分の暮らしている地域の遺跡については特に、住民の一人ひとりがしっかり考えていかなければならないと思う。遺跡が自然消滅したりなどということのないように、行政とも一体となって、保存や活用の方法についてみんなが興味を持ち、考えるようになることで、自分たちの地域そのものの発展にもつながると思う。そういった意識を住民全員で共有できるようになることが、遺跡の保存・活用につながる第一歩になるように思うのである。

【参加者の感想】

○「駅を出ると、そこは弥生時代だった」みたいに簡潔な方がいいかもと思いました。

○釜蓋遺跡が新幹線上越妙高駅前とははじめて知り、保存･活用について大変な御苦労が待っていると思います。開通の際を期待しております。

○駅から近距離の遺跡、大変面白く楽しくなりそうな気配を感じました（経済性と保存の大切さと利用を考えて）。地方のひなびた遺跡の活用に考えさせられたお話、有意義で参考にしたい感じです。

○再来年の北陸新幹線の開通に向けたタイムリーな話題を、文化財保存・経済学の視点から考えることができ、新鮮だった。文化財の保護と地元経済の発展という一見相反する難しい問題であるが、双方にとって最も最善となる方法を地域住民・地元企業・行政と考えてゆかねばならないといえる。

○文化財の費用対効果を経済的な面から見るのも一つの見方であるが、要は知識を普及し、人を育てることも目標である。人が育って、将来、この方面に進む人がでてきたというようなことは、経済的な面と異なるのではないか。経済的な面だけでみるのは、一面的な見方と考えられる。

○文化財の保存、特に観光になるとむずかしい問題です。答えは無いと思います。しかし、歴史上たいせつなものだと考えます。なんとしても未来に残してもらいたいと思っています。協議会のますますの発展を願っています。

7月20日（土）に開催した大会には約50名の方にご参加いただきました。今回は当日参加いただいた方の中から、新潟大学で考古学を学ぶ学生の方から報告文をお書きいただきました。なお、大会に先立ち行われた総会では、「2012年度活動報告」「2013年度事業計画」などの議事が承認され、「2013・2014年度役員選出」で、会長に橋本博文さん、副会長に川上真紀子さんと大熊清さんが選出されました。大会後の懇親会も盛り上がりました。ここにご報告させていただきます。（事務局）

富士山の世界文化遺産登録に沸く山梨で26年ぶりの開催！

文化財保存全国協議会第44回山梨大会に参加して

木村　英祐

総会で発言する橋本会長（左手前）

去る6月28日（金）から30日（日）までの３日間、文全協第44回山梨大会が行われました。山梨での開催は私が学生だった1987年の第18回大会以来です。私は前日から山梨入りし、全日程に参加してきました。以下、ご報告します。

○6月28日（金）全国委員会・総会（山梨学院大学）

全国で活動する会員が年に１度集まる総会です。１年間の文全協の活動をふりかえり、2013年度の運動方針を協議しました。運動方針の議論の中で橋本会長は「若い会員拡大のために学生を取り込む努力をすべき。学生会費の導入など検討できないか？」と述べ、会の活性化を訴えました。また、喫緊の課題として「佐賀県吉野ヶ里遺跡メガソーラー問題」「奈良市平城宮跡の舗装・埋め立て問題」「神奈川県茅ヶ崎市下寺尾官衙遺跡群の保存問題」「八ッ場ダム建設予定地の遺跡保存問題」などが報告・討議され、４つの総会アピール（文全協ホームページに全文を掲載しています）を採択しました。

河口浅間神社本殿

○6月29日（土）富士北麓文化遺産見学会・懇親会

直前の6月22日に世界文化遺産への登録が決定した富士山。その信仰に関わる富士北麓の文化遺産の数々をめぐりました。午前中は、富士河口湖町の河口浅間神社、古代の官道跡が見つかっている鯉ノ水遺跡、そして、富士山最古の神社といわれる富士吉田市の冨士御室浅間神社を見学しました。

名物・吉田うどんでお腹を満たしたのち、午後は、富士吉田市歴史民俗博物館で当地の豊かな歴史と富士信仰について学び、吉田口登山道の起点である北口本宮富士浅間神社、そして、御師の家・外川家住宅などを見学しました。梅雨空の中、富士山はなかなか姿を見せてくれませんでしたが、最後に立ち寄った河口湖畔ではうっすらと山頂が･･･。奇跡的に雨にあわずに全行程を終え、参加者一同大満足でした。

夜は恒例の懇親会。全国の仲間たちと交流を深めました。

北口本宮富士浅間神社

○6月30日（日）大会「史跡整備と世界遺産」（山梨学院大学）

大会は、近くにヤマトタケルの酒折宮伝承が残る山梨学院大学を会場に行われ、全国の会員のほか地元市民・研究者が多数参加。特に若い学生の姿が目立ちました。地元山梨県か

御師の家・外川家住宅

らは、南アルプス市における小さな行政の中での文化財活用の取り組み、山梨県による甲府城跡の保存整備の様子、富士山の世界遺産登録推進の経過と課題などの報告、そして「富士山の世界文化遺産と富士山信仰」と題する清雲俊元さんの基調講演がありました。全国の保存運動の問題としては、総会でもアピールが採択された、吉野ヶ里遺跡群のメガソーラー問題、世界遺産・平城宮のコンクリート舗装化、群馬県長野原町八ッ場ダムの文化財保存問題の３点の報告がありました。いずれも著名な遺跡の数々が抱える危機について切実な報告がなされました。

復元された甲府城稲荷櫓
（甲府駅北口方面から）

丸山塚古墳の墳頂部から
甲斐銚子塚古墳を望む

植え込みで表現された
上の平遺跡の方形周溝墓

なお、大会中に第14回和島誠一賞授賞式が行われました。個人部門では佐賀県吉野ヶ里遺跡の全面保存を訴え続ける江永次男さん、団体部門は「高速道路から世界遺産・平城京を守る会」（事務局長小井修一さん）が受賞されました。

さて、大会参加の合間に、私は周辺の遺跡や博物館を見学することができました。宿泊したホテル近くのＪＲ甲府駅と中央線は、実はそれ自体が文禄・慶長年間（1590年代）に築城された甲府城跡を絶ち切って造られています。南口東側の舞鶴城公園は県指定史跡となっており、県が主体となって石垣の修理、櫓や門の復元整備が進行中です。北口方面は甲府市が整備した歴史公園のほか、レトロな町並みが再現されています。現在は県庁などが建ち並ぶ駅の南側にも甲府城の遺構が眠っているようです。さらなる調査が待たれます。また、甲府駅南口から30分ほど路線バスに揺られると、そこは甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園です。この丘陵は様々な時代の遺跡が密集する遺跡の宝庫です。公園の入り口にある山梨県立考古博物館では、これら丘陵内の遺跡からの出土品のほか、県内の豊かな遺物の数々を見学することができます。ちょうど、東京都内から中学生の団体が見学に来ていましたが、こうした県内外の小・中学生の学習の場にもなっているそうです。丘陵内には県内最大級の前方後円墳である甲斐銚子塚古墳とそれに寄り添う県内最大の円墳・丸山塚古墳などいくつかの古墳群が整備されています。また、1979年からの調査で125基もの方形周溝墓が見つかり、東日本最大規模の方形周溝墓群として注目された上の平遺跡は、うち35基もの方形周溝墓が植え込みなどによって復元整備されています。自然豊かな丘陵の遺跡群が丸ごと保存され、市民の憩いの場として親しまれています。ぜひ訪ねてみてください。

編集後記

この『会報』は文全協会員でなくても、文新協行事に参加された方には、可能な限りお送りしています（ご参加なき場合は郵送を取りやめる場合があります）。名簿は本会からの連絡にのみ使用し、個人情報保護に留意し厳正に管理しています。会報送付がご迷惑な方は、事務局までご一報下さい。

文化財保存新潟県協議会事務局（入会についてのお問い合わせも）
Ｅ－ｍａｉｌ：bun-sin-kyou@js8.so-net.ne.jp
ホームページ：http://www014.upp.so-net.ne.jp/bunsin-k/（ＵＲＬが変わりました）